◆読み比べ◆

沖つ白浪（『大和物語』）

要旨

大和の国に男と女が思い合って暮らしていた。その後、女が貧しくなり、男は別の女のところに通うようになった。男を送り出す女の態度に女の異心を疑い、前栽のもとに隠れて見ていたら、女は男の身を案じる歌をうたい、また金椀に入った水が沸騰するほど男を思っていた。その女の気持ちを知り、女をいとおしく思った男は、新しい妻のところには通わなくなってしまった。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜六七・5〈せさせけり。〉	大和の国に住んでいる男女がいて、女はたいそう美しく、思い合って暮らしていたが、女がたいそう貧しくなってしまったので、男は別の妻を作ってしまった。
第二	六七・6〈かくにぎははしき〉〜六七・10〈思ひけり。〉	裕福な女のところに通いなれて、たまにもとの女のところに来てみると、女はみすぼらしい様子をしていて、男がよその女のところに行くのを妬ましそうにもしていない。男が女のもとに泊まろうと思う夜も、「行きなさい」といったので、女がこのような態度であるのは、他の男を通わせているからだろうと男は思った。
第三	六七・11〈さて、出でて〉〜六八・2〈なむありける。〉	男は出ていくと見せかけて前栽のかげに隠れて見ていたところ、女は、月のたいそう美しい夜に、外に出て身だしなみを整えて、男の身を案じる歌を詠んだ。男はそのことがわかり、女のことをたいそういとおしく思った。

第四	六八・3〈かくて、なほ〉～六八・7〈ゐにけり。〉
第五	六八・8〈かくて、月日〉～終わり

さらに男が見ていたところ、女は金属製の椀に水を入れて胸に据え、その水が沸騰したので捨て、また水を入れていた。それを見て、たいそういとおしく思い、走り出して女を抱きかかえて寝てしまった。他のところにも全く行かなくなって、そのまま女のもとにいた。

月日が多く経って、通わなくなった女のことを思い出し、行ってみたところ、女はみすぼらしい服を着て、大きな櫛を額髪にさしていて、自身でご飯をよそっている姿を見て、幻滅し、その後通わなくなってしまった。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①昔(むかし)、大和(やまと)の国(くに) 葛城(かづらき)の郡(こほり) に〔格助・場所〕 住(す)む〔マ四・体〕 男(をとこ)・女(をんな) あり〔ラ変・用〕 けり。〔過・終〕 ②こ〔代〕 の〔格助・体修〕
女(をんな)、顔(かほ)かたち いと〔副〕 清(きよ)らなり。〔形動ナリ・終〕 ③年(とし)ごろ 思(おも)ひかはし〔サ変・用〕 て〔接助・単接〕 住(す)む〔マ四・体〕 に、〔接助・逆確〕
こ〔代〕 の〔格助・体修〕 女(をんな)、 いと〔副〕 わろく〔形ク・用〕 なり〔ラ四・用〕 に〔完・用〕 けれ〔過・已〕 ば、〔接助・順理〕 思(おも)ひわづらひ〔ハ四・用〕 て、〔接助・単接〕
限(かぎ)りなく〔形ク・用〕 思(おも)ひ〔ハ四・用〕 ながら、〔接助・逆接〕 妻(め) を〔格助・対象〕 まうけ〔カ下二・用〕 て〔完・用〕 けり。〔過・終〕 ④こ〔代〕 の〔格助・体修〕 今(いま)
の〔格助・体修〕 妻(め) は、〔係助・区別〕 富(と)み〔マ四・用〕 たる〔存・体〕 女(をんな) に〔断・用〕 なむ〔係助・強意(係)〕 あり〔補動・ラ変・用〕 ける。〔過・体(結)〕 ⑤ことに〔形動ナリ・用〕
思(おも)は〔ハ四・未〕 ね〔打・已〕 ど、〔接助・逆接〕 行(ゆ)け〔カ四・已〕 ば〔接助・順恒〕 いみじう〔形シク・用(ウ音)〕 いたはり、〔ラ四・用〕 身(み) の〔格助・体修〕 装束(さうぞく)
も〔係助・同類〕 いと〔副〕 清(きよ)らに〔形動ナリ・用〕 せ〔サ変・未〕 させ〔使・用〕 けり。〔過・終〕
⑥かく〔副〕 にぎははしき〔形シク・体〕 所(ところ) に〔格助・場所〕 ならひ〔ハ四・用〕 て、〔接助・単接〕 来(き)〔カ変・用〕 たれ〔完・已〕 ば、〔接助・順偶〕 こ〔代〕
の〔格助・体修〕 女(をんな)、 いと〔副〕 わろげに〔形動ナリ・用〕 て〔接助・単接〕 ゐ〔ワ上一・用〕 て、〔接助・単接〕 かく〔副〕 ほか に〔格助・場所〕
ありけ〔カ四・已〕 ど、〔接助・逆接〕 さらに〔副〕 妬(ねた)げに〔形動ナリ・用〕 も〔係助・同類〕 見(み)え〔ヤ下二・未〕 ず〔打・用〕 など〔副助・例示〕 あれ〔ラ変・已〕 ば、〔接助・順理〕
いと〔副〕 あはれ〔形動ナリ・語幹〕 と〔格助・引用〕 思(おも)ひ〔ハ四・用〕 けり。〔過・終〕 ⑦心地(ここち) に〔格助・場所〕 は、〔係助・区別〕 限(かぎ)りなく〔形ク・用〕 妬(ねた)く〔形ク・用〕

①昔、大和の国、葛城の郡に住む男と女がいた。②この女は、容貌がたいそう美しかった。③年来、互いに思い合って住んでいたが、この女は、たいそう貧しくなってしまったので、（男は）思い悩んで、（女のことを）この上なく大切に思いながら、他に妻を作ってしまった。④この今の妻は、裕福な女だったのである。⑤（この妻のことを）特別に愛しいとは思わないが、（男が）行けばたいそう大切にしてくれ、身にまとう装束もたいそう美しく整えさせなさった。

⑥このように裕福な所に慣れて、（もとの妻の所へ）来てみると、この女は、たいそうみすぼらしい様子で暮らしており、（男が）こうしてほかの女のところへ出歩くのに、嫉妬しているようにも全く見えないこともあり、（男は女を）ひどく見えないと不憫だと思った。⑦（女は）内心では、この上なく妬ましく辛く思っているのを、我慢してい

心憂く　思ふ　を、　忍ぶる　に　なむ　あり　ける。　⑧とどまり　な
形ク・用　八四・体　格助・対象　バ上二・体　断・用　係助・強意(係)　ラ変・用　過・体(結)　ラ四・用　強・未

む　と　思ふ　夜も、　なほ　「往ね。」　と　言ひ　けれ　ば、　わ
意・終　格助・引用　八四・体　係助・同類　副　ナ変・命　格助・引用　八四・用　過・已　接助・順理　代

が　かく　ありき　する　を　妬ま　で、　異わざ　する　に
格助・主格　副　サ変・体　格助・対象　マ四・未　接助・打消　サ変・体　断・用

や　あら　む、　さる　わざ　せ　ず　は　恨むる　こと　も
係助・疑問(係)　補動・ラ変・未　推・体(結)　ラ変・体　サ変・未　打・用　係助・区別　マ四・体　係助・同類

あり　な　む　など、　心　の　うち　に　思ひ　けり。
ラ変・用　強・未　推・終　副助・例示　格助・体修　格助・場所　八四・用　過・終

⑨さて、　出で　て　行く　と　見え　て、　前栽　の　中
接　ダ下二・用　接助・単接　カ四・終　格助・引用　ヤ下二・用　接助・単接　格助・体修

に　隠れ　て、　男　や　来る　と　見れ　ば、　端
格助・場所　ラ下二・用　接助・単接　係助・疑問(係)　カ変・体(結)　格助・引用　マ上一・已　接助・順偶

に　出で　ゐ　て、　月　の　いと　いみじう　おもしろき
格助・場所　ダ下二・用　ワ上一・用　接助・単接　格助・主格　副　形シク・用(ウ音)　形ク・体

に、　頭　かいけづり　など　し　て　を　り。　⑩夜　更る　まで
接助・単接　ラ四・用　副助・例示　サ変・用　接助・単接　ラ変・終　カ下二・体　副助・範囲

寝　ず、　いと　いたう　うち嘆き　て　ながめ　けれ　ば、　人
ナ下二・未　打・用　副　形ク・用(ウ音)　カ四・用　接助・単接　マ下二・用　過・已　接助・順偶

待つ　な　めり　と　見る　に、　使ふ　人　の　前　なり
タ四・体　断・体(撥音(無表記))　推・終　格助・引用　マ上二・体　接助・単接　八四・体　格助・同格　存・用

ける　に　言ひ　ける。
過・体　格助・対象　八四・用　過・体

るのだった。⑧(男がもとの妻の所に)泊まろうと思う夜も、(女は)やはり「(今の妻の元へ)行きなさい。」と言ったので、自分がこのように出歩くのを妬まず、(それでいて)他に男を通わせているのだろうか、そんなことをしないなら、きっと(自分を)恨むこともあろうなどと、心の中で思った。

⑨そこで、(男は)出て行くと見せかけて、庭の植え込みの中に隠れて、男が来るかと(思って)見ると、(女は)縁側に出て座って、月が実にたいそう美しい時分に、髪を櫛でとかしたりしている。⑩(女は)夜が更けるまで寝ず、たいそうひどく嘆いて物思いにふけっていたので、(男は)人を待つようだと思って見ていると、(女は)前にいた召し使いに言った。

⑪風吹けば　沖つ白浪　たつた山　夜半に　や
カ四・已　接助・順恒　格助・体修　格助・時間　係助・疑問(係)

君が　ひとり　越ゆらむ
格助・主格　ヤ下二・終　現推・体(結)

と　詠み　けれ　ば、わが　うへ　を　思ふ　なり　けり
格助・引用　マ四・用　過・已　接助・順理　代　格助・主格　格助・対象　八四・体　断用　過・終

と　思ふ　に、いと　かなしう　なり　ぬ。⑫この　今の
格助・引用　八四・体　接助・単接　副　形シク・用(ウ音)　ラ四・用　完・終　代　格助・体修

妻の　家は、竜田山　越え　て　行く　道に　なむ
格助・体修　係助・区別　ヤ下二・用　接助・単接　カ四・体　格助・場所　係助・強意(係)

あり　ける。
ラ変・用　過・体(結)

⑬かく　て、なほ　見　をり　けれ　ば、この　女、うち泣き
副　接助・単接　副　マ上一・用　ラ変・用　過・已　接助・順偶　代　格助・体修　カ四・用

て　伏し　て、金椀に　水を　入れ　て、胸に
接助・単接　サ四・用　接助・単接　格助・対象　格助・対象　ラ下二・用　接助・単接　格助・対象

なむ　据ゑ　たり　ける。⑭あやし、いかに　する　に　か
係助・強意(係)　ワ下二・用　存・用　過・体(結)　形シク・終　副　サ変・体　断・用　係助・疑問(係)

あら　む　とて、なほ　見る。⑮され　ば、この　水、熱湯
補動・ラ変・未　推・体(結)　格助・引用　副　マ上一・終　ラ変・已　接助・順偶　代　格助・体修

に　たぎり　ぬれ　ば、湯を　ふて　つ。⑯また　水を　入る。
格助・変化　ラ四・用　完・已　接助・順偶　夕下二・用　完・終　副　格助・対象　ラ下二・終

⑰見る　に　いと　かなしく　て、「いかなる　心地
マ上一・体　接助・単接　副　形シク・用　接助・単接　形動ナリ・体

に　たぎり　ぬれ　ば、湯を　ふて　つ。⑯また　水を　入る。
格助・変化　ラ四・用　完・已　接助・順偶　夕下二・用　完・終　副　格助・対象　ラ下二・終

⑰見る　に　いと　かなしく　て、「いかなる　心地
マ上一・体　接助・単接　副　形シク・用　接助・単接　形動ナリ・体

走り出で　て、
ダ下二・用　接助・単接

⑪風吹けば…風が吹けば沖の白波が立つというその竜田山を、夜中にあなたは一人で越えているのでしょうか。

と詠んだので、（男は）自分の身の上を案じているのだったよと思うと、たいそう愛しくなった。⑫この今の妻の家は、竜田山を越えて行く途中にあった。

⑬こうしてさらに見ていたところ、この女は、泣き伏して、金属製の碗に水を入れて、（それを）胸にあてていた。⑭おかしなこと、どうするのだろうと思って、なおも見る。⑮すると、この水が、熱湯へと沸き立ったので、（女は）湯を捨てた。⑯また水を入れる。⑰見ているとたいそう悲しくて、（男は思わず）走り出て、「どんなお気持ちになられて、このようになさるのですか。」と言って、（女を）抱きかかえて寝てしまった。⑱こうして、（男はそれ以来）よそへも全く行かずに、

し　給へ　ば、かく　は　し　給ふ
サ変・用　補動・八四・已（尊）男→もとの女　接助・順理　副　係助・強意　サ変・用　補動・八四・体（尊）男→もとの女

ぞ。」　と　言ひ　て、かき抱き　て　なむ　寝に　ける。
終助・疑問　格助・引用　八四・用　接助・単接　カ四・用　接助・単接　係助・強意（係）　ナ下二・用　完・用　過・体（結）

⑱かく　て、ほかへ　も　さらに　行か　で、つと　ゐ　に
副　接助・単接　格助・方向　係助・同類　副　カ四・未　接助・打消　副　ワ上二・用　完・用

けり。
過・終

⑲かく　て、月日　多く　経　て　思ひやる　やう、つれなき　顔
副　接助・単接　形ク・用　八下二・用　接助・単接　ラ四・体　形ク・体

なれ　ど、女　の　思ふ　こと　いと　いみじき　こと　なり　ける
断・已　接助・逆接　格助・主格　八四・体　副　形シク・体　断・用　過・体

を、かく　行か　ぬ　を　いかに　思ふ　らむ　と、思ひ出で
接助・逆確　副　カ四・未　打・体　格助・対象　副　八四・終　現推・終　格助・引用　ダ下二・用

て、あり　し　女　の　がり　行き　たり　けり。⑳久しく　行か
接助・単接　ラ四・用　過・体　格助・体修　カ四・用　完・用　過・終　形シク・体

ざり　けれ　ば、つつましく　て　立て　り　けり。㉑さて、垣間め
打・用　過・已　接助・順理　形シク・用　接助・単接　タ四・已　完・用　過・終　接　マ四・已

ば、我　に　は　よく　て　見え　しか　ど、いと　あやしき
接助・順偶　格助・対象　係助・区別　形ク・用　接助・単接　ヤ下二・用　過・已　接助・逆接　副　形シク・体

さま　なる　衣　を　着　て、大櫛　を　面櫛　に
断・体　格助・対象　カ上一・用　接助・単接　格助・対象　格助・状態

挿しかけ　て　を り、手づから　飯　盛り　を り　けり。㉒いと　いみじ
カ下二・用　接助・単接　ラ変・用　副　ラ四・用　ラ変・用　過・終　副　形シク・終

（この女のもとを）ずっと離れずにいた。

⑲こうして、多くの月日が経って（男が今の妻を）思いやることには、何気ない顔ではあるが、（女が心の中で）思うことは実に大変なものだったのだから、こうして（自分が）訪ねて行かないのを（今の妻は）どう思っているだろうと思い出して、例の女の元へ行ったのだった。⑳長らく行かなかったので、（男は）気が引けて（外に）立っていた。㉑そして垣根の隙間からのぞき見ると、（かつては）自分には美しいと見えたけれど、（今は）たいそうみすぼらしい着物を着て、大きな櫛を額髪につきさしていて、自らの手で飯を盛っていた。㉒全くひどいと思って、（もとの妻のところへ）帰って来たまま、（今の妻の元へは）行かなくなってしまった。㉓この男は王族で

と　思ひ（おも）て、来（き）に　ける　ままに、行か　ず　なり　あった。
格助・引用　八四・用　接助・単接　カ変・用　完・用　過・体　連語（名＋格助・状態）　カ四・未　打・体　ラ変・用
に　けり。㉓この　男（をとこ）は　王（おほきみ）　なり　けり。（第百四十九段）
完・用　過・終　代　格助・体修　格助・区別　断・用　過・終

指導上の注意点

●六七ページ

問 **「思ひわづらひて」（2行目）の主語は誰か。**

答 男。

問 **「ことに思はねど」（5行目）とはどういう意味か。**

答 男が今の妻を特別にかわいいと思っているわけではなかったが

問 **「さらに妬げにも見えずなどあれば」（7行目）とはどういう意味か。**

答 嫉妬しているようにも全く見えないこともあり

補 「さらに～打ち消し」で、「全く～ない」の意味になる。

問 **「とどまりなむ」（8行目）について**

(1)主語は誰か。

(2)「な」を文法的に説明せよ。

答 (1)男。(2)完了の助動詞「ぬ」の未然形で、ここでは強意の意味になる。

問 **「異わざする」（9行目）とはここではどのようなことか。**

答 女が他に男を通わせていること。浮気をすること。

問 **「さるわざ」（10行目）とは何をさすか。**

答 「ことわざ」と同意で、他の男を通わせていること。

語句の研究

●六七ページ

2大和の国　現在の奈良県。

2葛城の郡　現在の奈良県西部の御所市と葛城市の辺り。

2清らなり　美しかった。「清げなり」と比べ、第一級の美しさを示す。

3わろくなりにければ　貧しくなってしまったので。生活が不如意になったことをいう。

4限りなく思ひながら　この上なく大切に思いながら。

4妻をまうけてけり　ほかに妻を作ってしまった。本話では、「今の妻」と呼ばれる。

5せさせけり　整えさせなさった。サ行変格活用動詞「す」の未然形「せ」に使役の助動詞「さす」の連用形「させ」が付いた形。「けり」は過去の助動詞「けり」の終止形。

6にぎははしき　裕福で繁栄している様子。

6ならひて　慣れて。裕福な今の妻のもとにいることに慣れてしまったことをいう。

6来たれば　（もとの女の所へ）来てみると。この一段の中で、もとの女の所へ訪れる折は「来」が使われ、今の妻の所へ訪れる折は「行く」が用いられる。

6いとわろげにゐて　たいそうみすぼらしい様子で暮らしており。今の妻の「にぎははしき」様子に対して、困窮した有様。

7さらに妬げにも見えず　嫉妬しているようにも全く見えない。

7心地には　内心では。

8心憂く思ふを　辛く思っているのを。

8忍ぶるになむありける　我慢しているのだった。「忍ぶる」はバ行上二段活用。他に、「偲ぶ」に由来する四段活用の例（未然形「忍ばず」など）も見られる。

9なほ　やはり。

9往ね　行きなさい。ナ行変格活用動詞「往ぬ」の命令形。本心を隠して今の妻の元へ行くよう勧める。

9異わざするにやあらむ　ほかに男を通わせているのだろうか。

10さるわざせずは　そんなことをしないなら。

11前栽　庭の植え込み。せんざい。『伊勢物語』の「筒井筒」でも「前栽の中に隠れゐて」とあった。

11男や来る　男が来るかと。「や」は係助詞。「来る」はカ行変格活用動詞「来」の連体形。

11端　縁側。

問「前栽」（11行目）の読みと意味はなにか。

答　読み　せんざい　意味　庭の植え込み

問「頭かいけづり」（12行目）とはどのようなことを意味するのか。

答　身だしなみを整えている。

問「いたう」（13行目）について説明せよ。

答　形容詞・ク活用・連用形「いたく」のウ音便化したもので、ここでは「ひどく」という意味を持つ。

問「なめり」（13行目）を文法的に説明せよ。

答　「な」は断定の助動詞「なり」の連体形の撥音便、「ん」の無表記、「めり」は視覚による推定の助動詞「めり」の終止形。

補　前栽に隠れて見ているので「めり」が使われている。

問「風吹けば」（15行目）の歌に見られる修辞上の技巧を説明せよ。

答　序詞・掛詞

補　「語句の研究」参照

問「風吹けば」（15行目）に込められている女の気持ちはどのようなものか。

答　ひたすらに夫を思い、今は旅にあって危険な山道をも行くであろう夫の身の上を気遣う気持ち。

補　「夜半にや君がひとり越ゆらむ」が、夫を気遣う内容になることに注意させる。

問「越ゆらむ」（15行目）の「らむ」を文法的に説明せよ。

答　現在推量の助動詞「らむ」の連体形。

●六八ページ

問「なりけり」（1行目）の「けり」には、男のどのような思いがあらわれているか。

答　詠嘆の助動詞で、自分のことを案じてくれている女の思いに対する感動。

補　「なりけり」の「けり」は詠嘆であることが多い。

問「かなし」（1行目）に漢字をあてよ。またここでの意味を答えよ。

答　「愛し」・いとしい

問「かく」（6行目）のさす内容を答えよ。

答　金椀に水を入れて胸に据えて、その水が沸騰したので湯を捨て、また水をいれる。

問「つれなき顔」（8行目）とは誰のどういう顔か。

答　河内の国の女の何気ない様子の顔。

問「あやしきさま」（11行目）の意味を答えよ。

答　みすぼらしい様子

補　「賤し」の漢字をあてる。

問「大櫛を面櫛に挿しかけてをり」（11行目）という描写は、女のどのような様子を表しているか。

答　女のはしたない様子。

補　人が見ていない時は見るかげもない様子であることを言い、大和の女と対比的に描いたりしている。

13月のいといみじうおもしろきに　月が実にたいそう風情があり美しい時分に。

13使ふ人　召し使い。

15風吹けば…　「筒井筒」語句の研究参照。

●六八ページ

1わがうへを思ふなりけり　自分の身の上を案じているのだったよ。

1かなしうなりぬ　愛おしくなった。「かなしう」は「かなしく」のウ音便。

3金椀　金属製の椀。

5ふてつ　捨てた。『かたこと』（一六五年）に「捨るといふべきを、ふつるといふは如何」とあるが、同時代の用例は確認されない。

5いとかなしくて　たいそう愛おしくて。先の「いとかなしうなりぬ」の感情を再び抱いた。

7つとゐにけり　（この女のそばを）ずっと離れずにいた。

8月日多く経て思ひやるやう　多くの月日が経って思いやることには。「つとゐにけり」という状況で久しく会わない今の妻のことを思いやる。

8つれなき顔　何気ない顔。内心を顔に出さ

ている。

問 **「この男は王なりけり」（13行目）という一文があることは、どのような効果があるか。**

答 「王」はここでは在原業平を指すので、業平が主人公の物語と読めるように、全体が再構成される。

ない。

9ありし女のがり　今の妻の所へ。「がり」は代名詞や人を表わす名詞に付いて、その人の許へ、という意を表す。「があり」「かあり」の変化したものと言われる。

10つつましくて立てりけり　気が引けて（外に）立っていた。

10垣間めば　垣根の隙間からのぞき見ると。

11大櫛を面櫛に挿しかけてをり　大きな櫛を額髪に挿していて。

12来にけるままに　帰って来たまま。

13王　天皇の子や孫で、親王宣下を受けない男子。平城天皇の孫に当たる在原業平（「芥川」語句の研究「昔、男ありけり」の項参照）をほのめかす。